

平成 21 年 1 月 24 日

伊勢国分寺跡第 35 次発掘調査現地説明会資料

所在地	鈴鹿市国分町字堂跡 299 番外
調査目的	学術調査（史跡整備）
調査期間	平成 20 年 7 月 14 日～2 月下旬（予定）
事業主体	鈴鹿市
調査担当	鈴鹿市考古博物館
調査面積	約 1,700 m ²

1 はじめに

伊勢国分寺跡は大正 11 年に国の史跡に指定され、昭和 63 年度から実施された範囲確認調査では築地塀に囲まれた約 180m 四方の伽藍地が明らかとなりました。地権者の皆様の御協力により史跡の公有地化を行い、平成 11 年度から 7 か年をかけて伽藍配置の確認調査を実施しました。その結果、講堂・金堂・中門・南門・僧坊等の位置や規模がほぼ明らかとなりました。塔が未確認であるものの、伽藍地東半には「小院」・「北東院」などの区画を有することがわかりました。

平成 18 年度には国史跡伊勢国分寺跡保存整備検討委員会を組織し、平成 27 年度完成をめざして歴史公園の整備に取り組むこととなりました。今回の調査は、整備の最終的な資料を得るため、最も保存状態の良い講堂基壇の構造や小院・北東院の詳細等を確認するため実施したものです。

2 調査成果

(1) 講堂

南・北面を中心に延石状に並べられた塼（せん）の列が見つかりました。使われている塼は断面が台形となるもので、全国に例を見ない特異な講堂基壇の構造が明らかとなりました。北面の塼列には 2 段目が残存していることから、少なくとも 2 段は積まれていたことが想定できます。塼は大部分が下底面を外側に向けて配置されています。

南面では塼列に加えて、同じく塼が並べられた約 1.8m 四方の張り出し部分が 2 か所見つかりました。これらは階段の基礎にあたり、南面中央および東の階段に相当すると考えられます。それぞれの東辺を除いては破損品が使用されており、元はさらに幅の広い階段であった可能性があります。

さらに東・西・南面には瓦や塼が積まれている部分が見つかりました。これらの瓦塼列は、長軸端や短軸端を揃えて並べられており、軒丸瓦の瓦当面を外側に向けているものもあります。東面では塼列の真上に位置するのに対し、南面では塼列の 10～20cm 内側に並

べられています。

これらの埴列や瓦埴列は基壇化粧の一部で、講堂基壇の廃絶時の状況を反映しています。講堂基壇の維持修繕が途絶えた時期は10世紀以降のことと考えられ、様々な部材を補って、やや統一感に欠けた基壇の状況が想像できます。

創建時における基壇の構造を留めているか、もしくは反映していると考えられるのは台形埴による埴列や南面東階段の東辺部分と思われます。

(2) 小院・北東院

北東院は8世紀末から9世紀初頭にかけて国分寺の大規模な修理が行われたときに新たに設けられた南北93m・東西63mほどの区画で、その地上部分は築地塀であったと想定されています。小院はその南に張り出すようにして見つかった東西45m・南北30mの区画ですが、北東院との関係が不明でした。

今回の調査では、小院東辺の溝が一部北東院と重なって検出され、その切り合い関係から北東院より先行することが推定できました。加えて小院内に一辺約27mの方形にめぐる溝が断続的に見つかりました。溝で囲まれた部分に建物があった可能性はあるものの、柱痕跡や掘込地業などはありません。未だ発見されていない塔跡の候補となりますが、塔の存在を示す直接的な証拠は見つかっていません。

(3) その他

伽藍地を画する築地塀の角や鐘楼・経蔵推定地の調査を実施しております。築地塀の角部分については不明確ながら推定はできそうです。鐘楼・経蔵推定地については残念ながら関連する遺構が見つかっていません。

関連年表

天平9年(737)	国毎に釈迦三尊像造像と大般若經書写を命ずる
天平12年(740)	国毎に法華經書写と七重塔建立を命ずる
天平13年(741)	諸国に七重塔建立と金光明最勝王經・妙法蓮華經書写を命ずる
天平19年(747)	国分寺地検定・造堂督促
天平宝字3年(759)	国分二寺の園を諸国にわかし下す
宝龜6年(775)	伊勢・尾張・美濃で異常風雨、国分寺・諸寺の塔19損壊
大同4年(809)	志摩国分二寺の僧尼を伊勢国分寺に移す
建久3年(1192)	山辺御園内の大鹿村、国分寺領を号す
徳治3年(1308)	法勝寺領として伊勢国分寺の記録あり
明和8年(1771)	萱生由章(かようよりふみ)、「常慶山国分寺縁起」を著す

用語解説

国分寺（こくぶんじ）

奈良時代に、国ごとに建てられた官寺。僧寺と尼寺がある。狭義には僧寺を指し、その場合尼寺は「国分尼寺（こくぶんにじ）」といわれる。国分寺の正式名称は「金光明四天王護国之寺（こんこうみょうしてんのうごこくのてら）」で、国分尼寺は「法華滅罪之寺（ほっけめつざいのてら）」である。僧寺には僧 20 人、尼寺には尼 10 人が置かれた。

瓦葺礎石建物で構成される場合が多く、金堂・塔・講堂などの主要伽藍は築地塀などによって囲まれる。10 世紀頃までは修復が繰り返され、維持が図られるものの、11 世紀頃には衰退したと考えられている。

瓦葺礎石建物（かわらぶきそせきたてもの）

屋根に瓦を葺き、礎石の上に柱を立てた建物。6 世紀末の飛鳥寺（奈良県高市郡明日香村）が初期の例で、遅れて地方寺院や官衙にも採用された。建物そのものが残っていないとしても、瓦や礎石が散布していることにより、その存在が推定されることがある。

基壇（きだん）

地表面より高く土が盛られた建物の土台部分。基壇の築成は盛土によるのが一般的で、質の異なる土を交互に突き固める「版築（はんちく）」工法が用いられることが多い。建物もしくは基壇の地下部分を掘り下げ、突き固めながら埋め戻し、地盤改良を行った「掘込地業（ほりこみじぎょう）」が見られる場合も多い。伊勢国分寺跡においては掘込地業の確認によって金堂の所在が確認された。

塼（せん）

古代建築の壁や床に用いられた板状ないしはブロック状の部材。瓦質や陶製などの窯業製品で、石製の場合は「磚（せん）」と表記することが多い。伊勢国分寺の塼は古代の瓦と同質の焼物で、一般的な方形板状の方塼に加えて、断面が台形となるもの（台形塼）が多く見られる。台形塼は今のところ他に例がない。

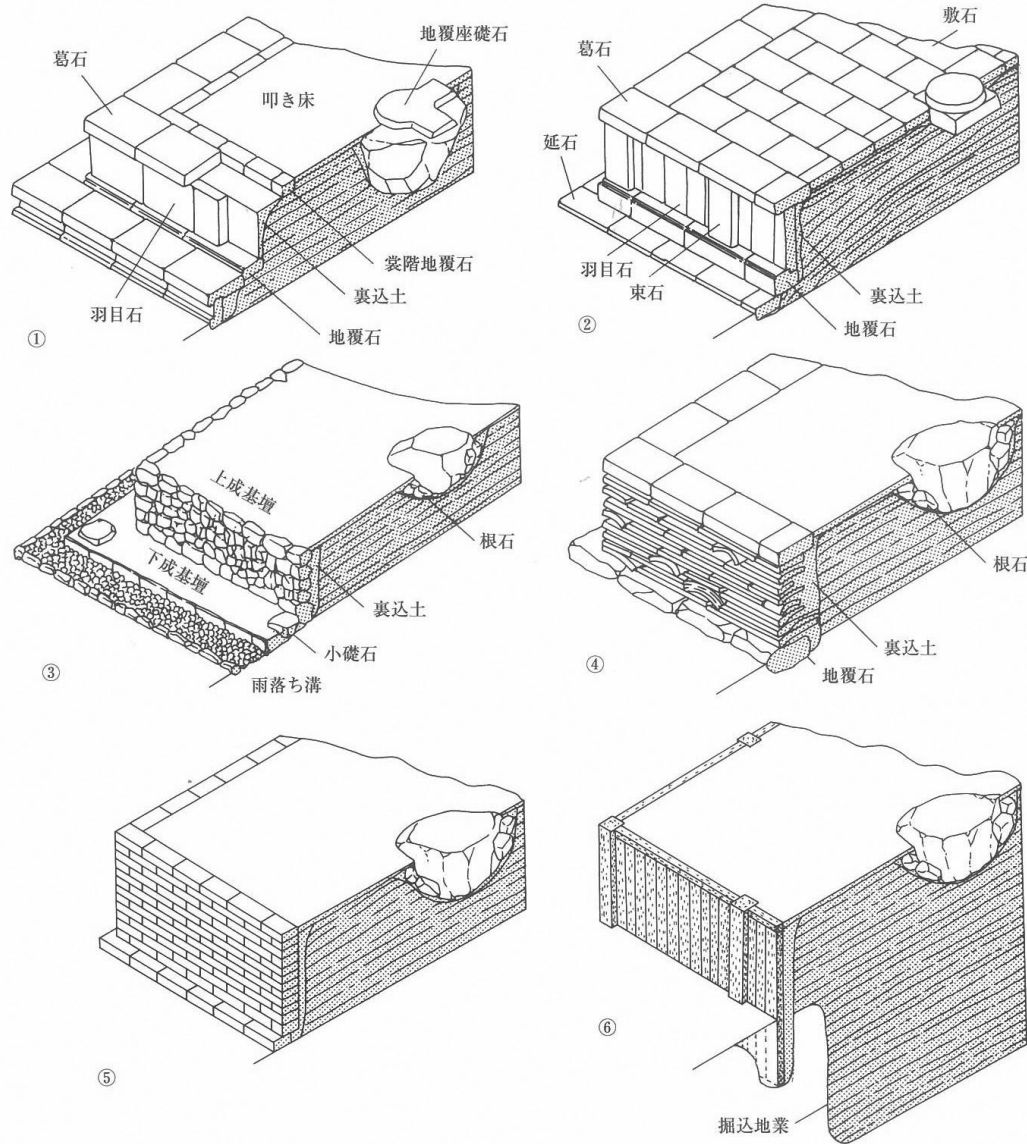
基壇化粧（きだんげしょう）

盛土の保護や建物の荘厳（しょうごん）のため基壇の側面や上面を塼（せん）や瓦などで覆うこと。「基壇外装（きだんがいそう）」とも呼ばれる。「塼積（せんづみ）」や「瓦積（かわらづみ）」などいくつかの種類が知られる。

引用参考文献

奈良文化財研究所編 2003 『古代の官衙遺跡 I 遺構編』

坂詰秀一編 2003 『仏教考古学事典』



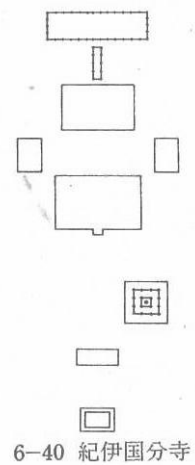
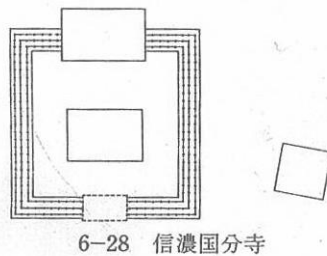
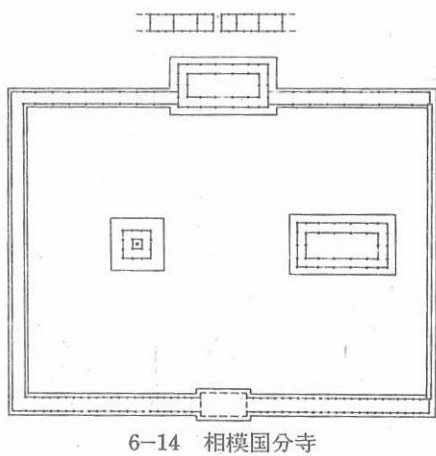
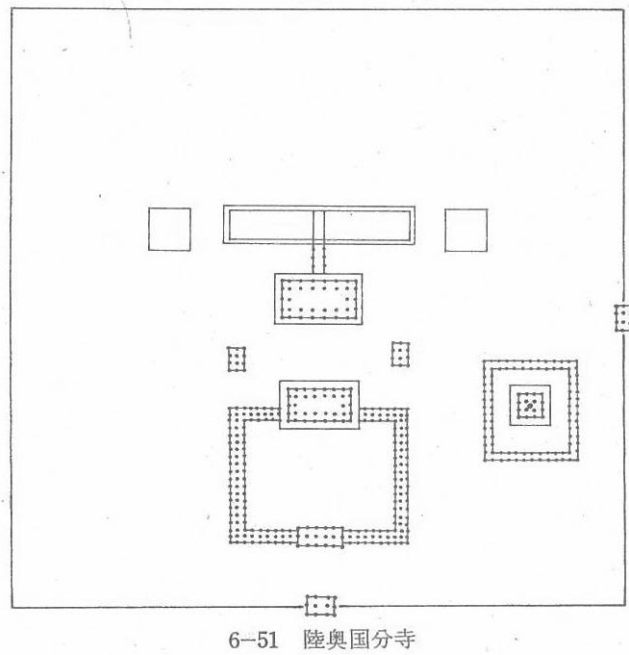
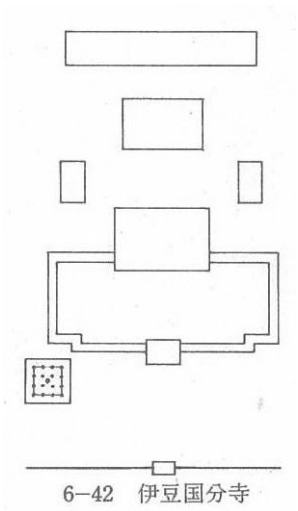
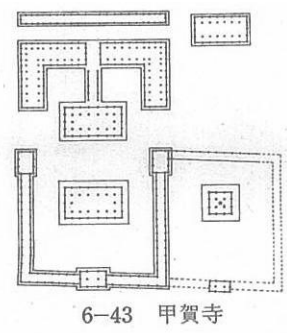
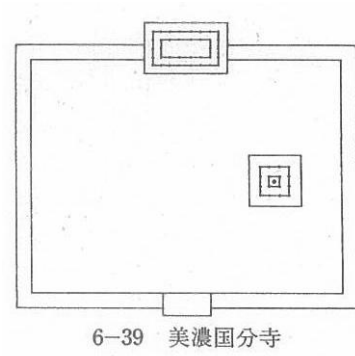
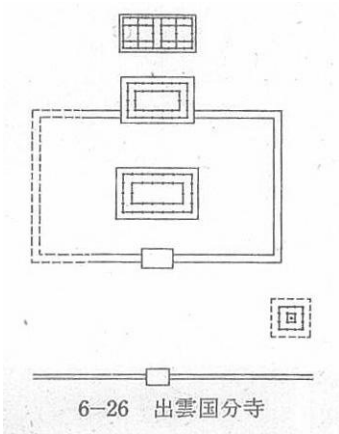
基壇のいろいろ



断面が台形の埴（せん）



方埴

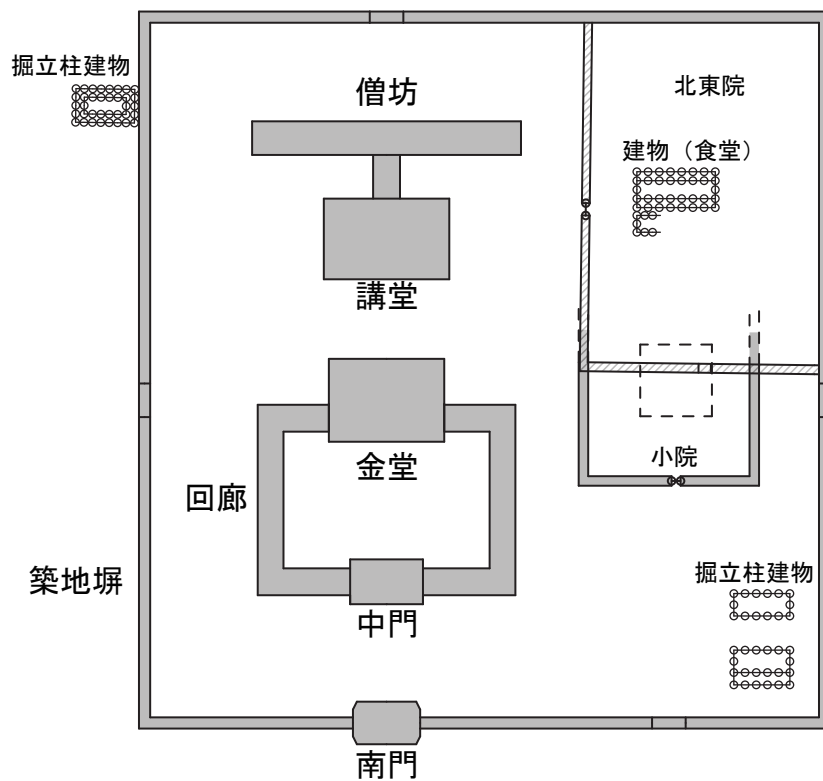


伽藍配置の例

太田博太郎 1979 「南都六宗寺院の建築構成」『日本古寺美術全集第2巻法隆寺と斑鳩の古寺』から引用

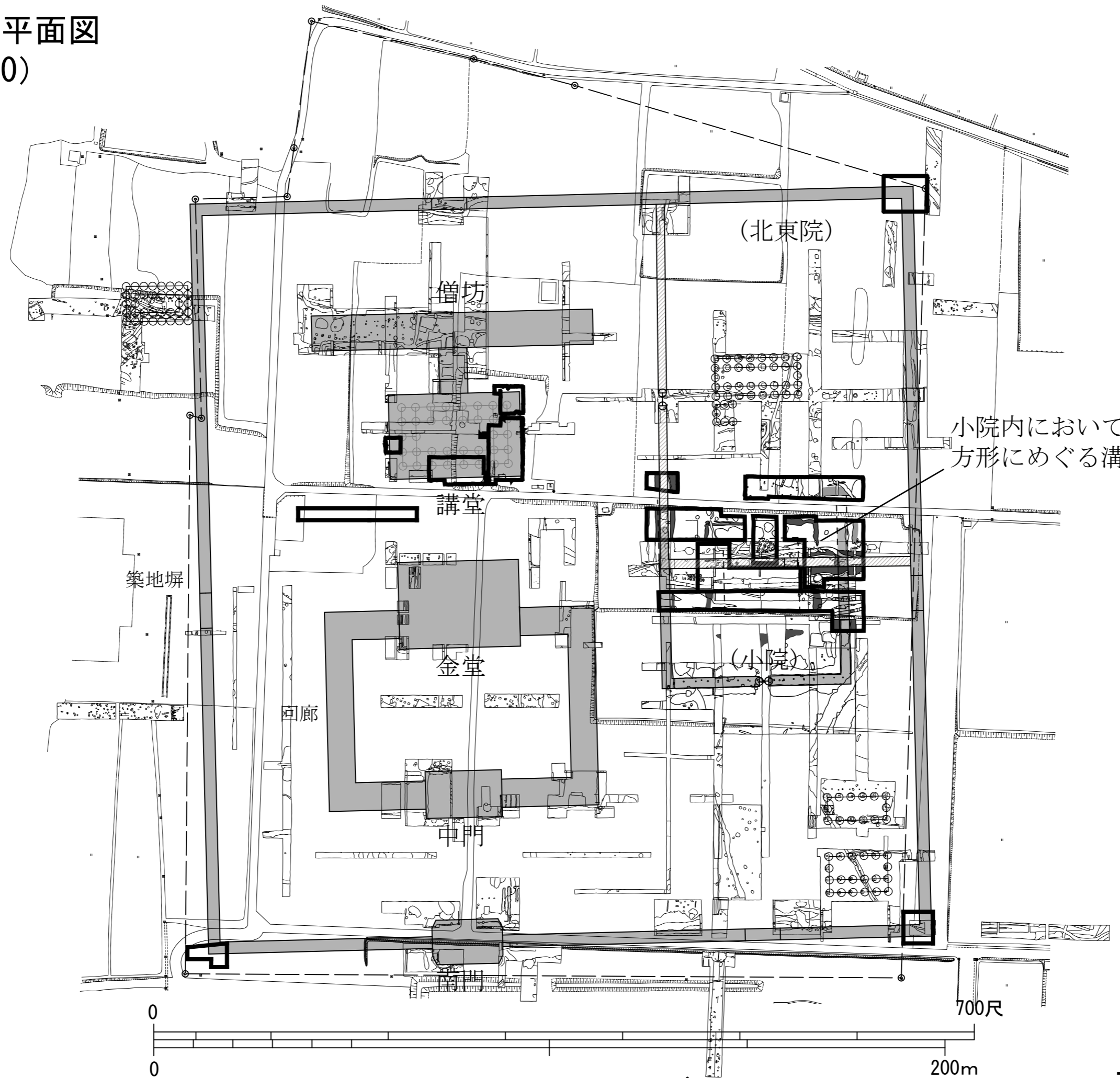


位置図 (縮尺1 : 5,000)



伊勢国分寺模式図 (縮尺1 : 2,000)

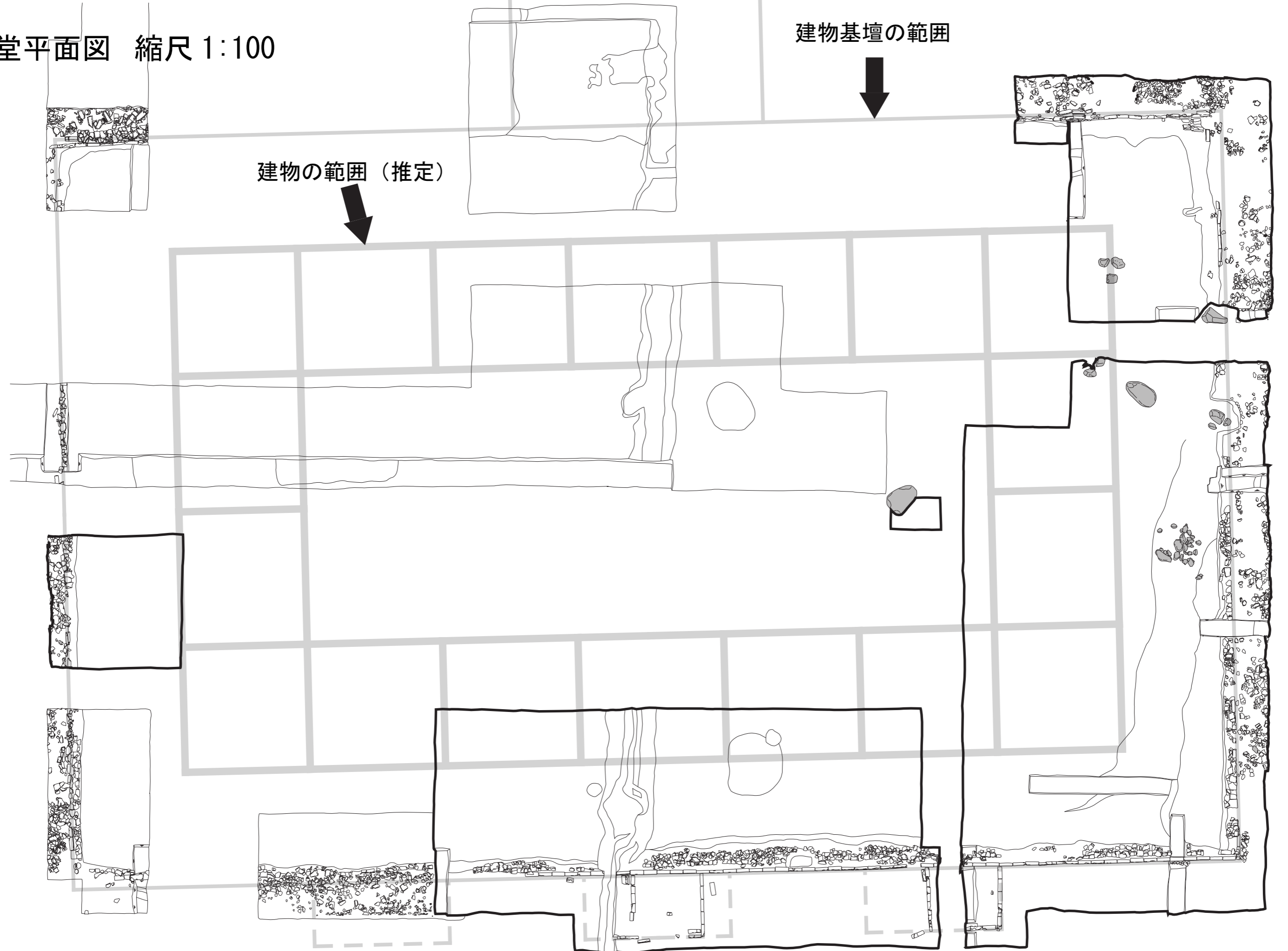
伊勢国分寺跡平面図
(縮尺1:1,000)



小院内において
方形にめぐる溝

太線 : 35次調査区

講堂平面図 縮尺 1:100



建物の範囲 (推定)

建物基壇の範囲

8

階段跡 (中央)

階段跡 (東)

太線 : 第 35 次調査区